

---

# 噂（うわさ）の彼

祇園慶次

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

噂うわさの彼

### 【コード】

N8340K

### 【作者名】

祇園慶次

### 【あらすじ】

会話劇です。初めて書きました。バージンです。バージンコーラです。色んなご指摘があると思いますが、その辺も含めて感想いただけると嬉しいです。

今夜はゴールデンウィーク直前の金曜日とだけあって、有楽町（銀座界隈の街は一段とにぎやかだった。それに連日の春の陽気も手伝って、このバーにもご機嫌な様子の新規客が何組か訪れたが、常連の多い店だけあってそういった客は他の店ほど多くなく、23時を回った店内にはいつもの常連客がぼつぼつと残っているだけであつた。

カウンターに座っているこの2人だけはそんな常連客達の間で唯一、今夜初めてこの店を訪れた客であつたが、ガヤガヤと入ってきた先ほどまでの新規客達とは違つてついさっきまで熱心に仕事の話をしていた。終始にぎやかだった新規客達がちらほら帰り始めるとようやく仕事の話もひと段落したのか、肩の力も抜け和やかな雰囲気でも飲み始めた。どうやら同じ会社の先輩と後輩らしい彼らはもうこれまでに6、7杯は飲んでいる。お互いしばらく無言であつたが、数年先輩らしい男の方が話を切り出した。

「お前つてさ、あれだよな」

「え、なんです？」

「・・・お前つてさ、あれだよな、つて言ったの」

「いや、だからそのあれつて何ですか？」

「ああ、聞こえてたのか。だからあれだよ、あー、ほら・・・」

「あー、あれですか？」

「うん。何言いたいかわかる？」

「インポの話ですか？」

「……え。お前……まさか」

「そんなまさか。元気ですけど」

「なんだよ、それ。笑えないよ」

「あ、じゃあ知らないんですね。先月入った営業の斉藤さん、知ってますか？」

「ああ、まだちゃんとあいさつはしてないけど知ってるよ」

「もう6年くらいそうらしいですよ」

「はあ、そうなのかあ。なんかそういうの聞くと俺も不安になってくるなあ。俺、インポの人に初めて会ったかもしれない」

「え、だって北方<sup>きたかた</sup>さん、斉藤さんとあいさつしたことないんですよ？」

「いや、身近にいるとは思わなかったってことだよ」

「ああ。でもそれだったら私もですよ」

「あ、お前も斉藤さんと面識ないんだ。ちなみにその話、誰から聞いたの？」

「いや、会ったことありますよ。だってその話、斉藤さん本人から聞いたんですもん」

「私もって言ったじゃん、今」

「だからインポの人に会ったのは私も初めてだってことですよ」

「ああ、そういうことね。あ、山崎のロックくれる？ダブルでチェイサーつけて。お前は？」

「あ、じゃあジントニックください」

しばらくするとジントニックと山崎12年のロックが出された。この店のカクテルグラスやワイングラスは他の店のものとそれほど大差はないが、ビアグラスとロックグラスだけは銅製で、店のオーナーが銅器で有名な富山県高岡市にある小さな工房からわざわざ個人取引をして取り寄せている。この高岡銅器のグラスでビールを作ればキメの細かい泡ができ、ウイスキーを作ればグラスに入ったアイスがキリッとウイスキーとグラス全体を急速に冷やし、鮮度の高い味わいを最後まで保つことができる。北方と呼ばれた男はこのグラスでジャパニーズウイスキーのまるやかさをじっくり味わい、しばらくその味の余韻に浸っていたが、急に何か思い出したように話し始めた。

「でもインポで思い出したけど、経理の三井さんいるだろ？あの美人の方の」

「ええ。・・・美人の方のって、ふふっ」

「ハハ、まあ、いいんだよ！それであの美人の方の三井さん、まだ  
独身らしいぜ」

「ああ、知ってますよ」

「なんだ、知ってたのか」

「ええ。あの、ひとついいですか？なんでインポからその話を思い  
出したんですか？」

「え？・・・うーん、なんでだろう」

「いやらしい目で見てるからですよ！今セクハラ厳しいですよ」

「ハハハ、ばれたか」

「まあ確かにあの人独身ですけど、一度結婚してるんですよ」

「え！？三井さん！？」

「ええ」

「美人の方の！？」

「今そつちの方の話しかしてないじゃないですか」

「ええ・・・、知らなかった」

「あの人去年中途で入ってきたでしょ？うちに来る前にちょうど離婚したみたいなんですよね」

「そうだったのかあ。全然見えないなあ」

「北方さん、結構ピュアだからなあ。あーいう人が魅力的に見えるんですよ？」

「うん、見える。お前、芸能人だというのがタイプ？」

「芸能人かあ、テレビ見ないからなー」

「全然見ないの？」

「全然つてわけじゃないですけど、パソコンやってる時間の方が長いかもしれないですね。芸能人はあまりわかりません。北方さんは？」

「俺はあれだな、深津絵里が好きだな」

「ああ〜」

「うん」

「三井さんを好きな理由がわかりました」

「だろ？」

「でも深津絵里ってヘビースモーカーだって知ってました？」

「え！そうなの？」

「っていう噂です。本当かどうかは知りませんが」

「まあ俺はそれでも全然かまわないけどな。お前よくそういうの知ってるな、テレビ見ないくせに」

「そういう情報はなぜか入ってくるんですよ。あ、そういえば、さっきのあれって何ですか？」

「ああ、あれ。うーん、なんだっけなあ。忘れちゃったけど、たぶん『お前ってさ、噂好きだよな』って言いたかったんだと思う。ハハハ」

「確かに・・・そうですね。気をつけます」

「そうだな、斉藤さんの話もあまり言わないようにした方がいいかもしれないな。お、もうこんな時間か。会計しよう」

「あれ、今日は早いですね」

「あ、ああ、うん。今日結構飲んだしな」

2人は帰り支度を済ませるとレジの方に向かって歩き出した。歩きながら北方がこう言った。

「しかしさ、さっきのインポの話、よく斉藤さんお前に話したよなあ」



「ええ。あの人が入社したの先月なんですけどねー」

「まあそれもそうだけどさ。普通の男はお前に話さないだろ」

「・・・そうですね」

「・・・あ！思い出した！さっきのあれの話」

「ああ。何だったんですか？」

「あれな、『お前ってさ、女に見えないよな』って言おうとしたんだ」

「よくそんな失礼なことが平気で言えますね。女って単語が出てこないなんて飲みすぎですよ」

「ハハハ。見た目はこんな美人なのになあ。いやお世辞じゃなく。でもお前と話していると女であるのを忘れる瞬間があるんだよな。だから斉藤さんもつい話しちゃったんじゃないか？しかしなんでそう思えるんだろうな。キャリアウーマンのオーラがそうさせているのかね？」

「うるさいですよ」

「ハハ、だからさ、新人の間じゃ『三井さんと中野さんはあんなに綺麗なのになぜ彼氏がないのか』って噂になってるぜ」

「それは私が聞きたいです。そっか、私のことも噂になってたんだ」

「そうだよ、ハハハ。噂って怖いねえ、中野さん」

「怖いですねえ。あ、そういえば北方さん、奥さん戻ってきたらしいですね」

「え、なんで知ってるの？」

男がそう尋ねると、女は不敵な笑みを浮かべ、颯爽と店を出て行った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8340k/>

---

噂（うわさ）の彼

2010年11月24日09時07分発行